

8) サカキ=榊

サカキはツバキ科サカキ属の常緑小高木で、関東南部より以西の山野に自生する。このサカキ属は西インド、ヒマラヤから、東南アジア、東アジア、またメキシコからパナマにかけて分布し、朝鮮南部、中国、台湾などにも見られる。若枝は緑白色で、翌年になると灰褐色となり、長楕円形の葉は互生し、革質で光沢がある。6~7月頃葉腋に白色の花を2~4個つけ、花色は後に黄色となる。果実は球形の液果で、秋には黒紫色に熟す。和名の由来は常に緑の葉が茂っているところから、「栄える木」が「栄え木」となり、「サカキ」になったといわれている。また「サ」という音は、桜、早乙女、五月の「サ」であるように、古来、精霊が宿ると思われていたところに多く用いられており、榊も精霊の宿る木と思われていたことが推測される。漢字の榊は、神の憑依する木という意味で作られた国字である。別称としてはカミシバ、アデ、マサカキ、カミサカキなどがある。学名は『*Cleyera japonica*』で、属名はオランダの薬用植物の研究家 A.クレイヤー氏の名に因む。中国では『楊桐』といわれるが、これは誤用であるという。

榊が初めて文献に現れるのは『記・紀』の、天照大御神が「天岩戸」に隠れたときの話で、呪術を行なう際の道具の一つとして登場する。この木の枝に『八咫鏡』や『勾玉』などを取り付けて、天照大御神が岩戸から出てくるのを祈ったのである。当時から神木として特別な力があると信じられていたのだろう。枝や葉は神前に供えられたり、御祓をするときなどに用いられた。また上代には榊に限らず神事に用いられる木は『賢木』(サカキ)と称され、古くはこの木を切ったり燃やしたりすることを禁じており、これを犯すと祟りがあると恐れられていた。

榊が特定の植物の名前として定着するのは、平安時代以降のことで、神の憑依する木として多くの俗信を生んだ。蒲団の下に榊の葉を敷いて寝ると吉夢が見られると言い、民間療法では、夜泣きやモノモライの治療に用いられた。また夜道を通る際に榊の枝を持って、「神の子」と唱えながら歩くと、狐狸や狼などの動物から身を守れると信じられていた。この風習はやがて関東では、馬酔木の枝を持って夜道を歩くと、動物から身を守ることができるという習俗を生んだ(02-01-06 馬酔木の項参照)。

榊の材は堅く緻密であるために、建築材、器具材などのほかに、箒や櫛などの細工ものに用いられたが、便所などの不浄なところに植えたり、船の材料などとすることは忌まれた。また俗に民家などに植えると、位負けするのでよくないといわれ、古くは庭に植えることはあまりなかった。しかし榊の熟した果実は、媒染剤無しで赤紫色の染料となり、当時は媒染剤を必要としない染料は少なかったので重宝されていた。このあたりにも神の木と思われる要素がひそんでいたのだろう。

榊は本州から四国、九州、沖縄の山野に自生しているが、関東北部や東北地方では殆ど見られず、榊の代わりに桧(ヒサカキ)が用いられ、これも俗に榊といわれている。



ヒサカキの若い果実(埼玉県所沢市)。北海道以外の日本中に分布する照葉樹林の筆頭格である。3~4月ごろ芳香のある花を咲かせるが、独特の香りでタクアン臭に近い(埼玉県所沢市)。



ヒサカキの熟した果実(埼玉県所沢市)。

[目次に戻る](#)